

タックスマンと財務長官

早速タックスマン(関税男)が本領を発揮した。トランプ次期大統領はカナダ、メキシコに25%、中国に追加の10%の関税を課すことを公言した。市場は前日、財務長官へのベッセントの起用で落ち着きを見せ始めた(ドル長期金利が低下しドルが下落した)が、関税で元に戻った感がある。

為替では当然のことながらカナダドルとメキシコペソが売られた。だが時間が経つにつれ両通貨は異なる軌道を描いている。ドルカナダドルは関税発言直後急落したが、その後半分近く戻し、直近では発言前と比べ0.7%ほどのカナダドルの下落に留まっている。一方ドルメキシコペソも急落したが、戻しが鈍く直近では発言前と比べ2%ほど下落している。

カナダのトルドー首相がすぐにトランプとの電話会談をしたのに対し、メキシコのシェインバーム大統領は報復をちらつかせたステートメントを読み上げただけだった。

ただトランプは、関税は移民や麻薬の制限のための措置とも言った。関税を貿易問題だけでなく、米国第一を念頭に広く地政学的な問題なども解決するための取引材料に使うということだ。

トランプ新政権は関税と規制緩和の大きな柱を掲げる。今回財務長官に指名されたベッセントは本質的に規制緩和論者だ。関税はインフレ要因と捉え、ネガティブな見方をしていた。この点が他の財務長官候補の陣営から攻撃されることもあった。だが関税は相手国との取引材料ということでトランプ側と折り合った。トランプは自らの政策の矛盾を、論理的に整合性を持たせてくれるベッセントの金融、経済の知識と経験が必要だし、ベッセントは関税に妥協しても、財務長官という金融ビジネスに携わる人の多くが目指すポストを手に入れる。関税は目的ではなく交渉材料と理解することで自分の論理に強引に組み込み、関税を駆使するトランプを天才的と絶賛するくらい朝飯前なのだろう。

第一次トランプ政権の通商部代表のライトハイザーや今回商務長官に任命されたルートニックなど政権での実績や忠誠心ではベッセントを上回る候補者もいた。それでもベッセントの指名は、トランプがただの気まぐれではなくリスク管理を意識したバランス感覚があることを示した。

ジョージ・ソロスの下で長年ヘッジファンドに携わり、マクロ政策と市場との関連性については多くの実践と経験を積んできた。その点では米国の財政赤字の拡大やインフレの上昇が米国への円滑な資本流入を阻み、ドルへの信頼が揺らぎ、流動性危機や金融危機などに陥るリスクは、他の候補者が財務長官になるよりも低いと思われる。

今後はトランプとどこまでうまくやれるか、政権内で関税や貿易を直接担当する閣僚たちと協調して仕事ができるか、特にポストを争った商務長官のルーティックとの関係はポイントになる。

トランプにおもねるばかりに、早めに影の FED 議長を任命して現パウエル議長らに圧力をかけ FED の独立を脅かすようなアイデアは悪知恵であり、勇み足だ。ベッセント自身もバランス感覚を求められる。